

渡良瀬遊水地をめぐる風土形成

村田香織

足尾を源とする渡良瀬川が利根川に流れ込む4 kmほど手前、栃木・群馬・茨城・埼玉の4県にまたがり、3,300haもの広大なヨシ原がある。

この「渡良瀬遊水地」は、足尾銅山鉱毒事件とも絡んだ洪水対策として、もともとこの地にあった谷中村の廃村・買収を経て、明治43（1910）年から大正11（1922）年にかけて形成された。その後も、洪水調節機能を増大させる調節池化工事や、利水の機能も与えようという貯水池造成工事など、利根川水系の一部としての位置づけが強化されるとともに、景観も次々と変化した。そして現在、様々な開発事業によって、さらに変化の局面に立たされている。

ゴルフ場の造成などを中心とするアクリメーションランド計画、第二貯水池造成計画、国際空港建設計画……。様々な計画が飛び交う中で、ゴルフ場など、いくつかの計画が実行に移された。地元では、「開発には大賛成」という人がある一方で開発反対の住民運動も盛り上がりを見せており、開発をめぐる、渡良瀬遊水地は揺れている。しかしながら、「前は、開発はいいことだと思っていたが、今は反対している」という人々の存在から、この地域では、当初、地域を通して開発計画を歓迎する気持ちが一般的であった様子が明らかになった。

渡良瀬遊水地周辺地域では、歴史的に時間をかけて、遊水地に対する負のイメージが形成されてきた。

「昔は怖いところだったけど、鉱毒事件なんかでね。開発されて変わりました」

渡良瀬遊水地では、鉱毒の被害・廃村・強制買収など、誕生時における悲劇に加え、差別や先祖への負い目など、旧谷中村民に関わる複雑な思いが、現在に至るまで蓄積を重ねてきた。地元であるが故に、歴史的な評価も難しく、「悲劇の土地」

という暗いイメージを残したまま、地元の人々の目は遊水地から離れていった。

「ただの水のたまり場が緑の公園となった」

同時に、地元の人々にとって、遊水地はヨシくらしいか生えない「不毛の地」でしかなかった。「悲劇の土地」・「不毛の地」である遊水地が、楽しく、利益をもたらす土地になると、建設省による開発計画を、地元は喜んで受け入れた。一方で、自然保護の視点が外部の活動家からもたらされた。貴重な鳥・植物・そして湿地といった、遊水地そのものが持つ自然環境としての価値に、地元住民自身が驚き、住民運動が始まった。「こんなに豊かなんならば守んなきゃいけない」

今地元では、数名の驚きが、自然観察会などを通して、多くの住民の驚きに広がっている。遊水地の歴史的な価値や水資源問題の視点などが加わることで、運動そのものも深化し、離れてしまっていた地元住民の目が、新たに遊水地に向き始めている。

一つの地域は、自然環境や社会的な作用を、居住する人々の内部や景観に蓄積し、空間的な共通性としての風土を持つ。新たなインパクトが地域にもたらされたとき、それをいかに受けとめるかが、その風土にかかっていると同時に、風土はまた、そのインパクトを内部化し動的に変化する。

渡良瀬遊水地では、遊水地を「悲劇の土地」・「不毛の地」と認識する風土が、開発計画をすんなりと受け入れ、あっという間にゴルフ場造成につながった。しかし一方で、開発計画をきっかけとして自然保護の視点がもたらされ、遊水地の見直しが一歩ひとりの意識の中で起こり始めている。ゴルフ場など、渡良瀬遊水地という場所性を無視した開発を拒否し、遊水地そのものの価値を見出していこうとする新たな風土が、今、形成されようとしているのである。